

## <博士學位論文要旨>

# 戦後日本の女性運動における「主体」問題とエイジェンシー・アプローチ

横浜国立大学大学院 環境情報学府

博士課程後期（2010年3月修了） 横山 道史

A Problem of “Subject” in Women’s Movement after World War and Agency Approach

Michifumi YOKOYAMA  
Graduate School of Environmental and Information Sciences, Yokohama National University

### ABSTRACT

This study analyzes a problem of “subject” in women’s movement after world war from the viewpoint of agency approach. It is a matter of that the women who is made gendered in the women’s movement. The woman means the symbol as a passive and subordinate existence such as “mother” in peace movement and “housewife” in consumer movement. But subordinate of women is systematically and how does women challenge to repressive social situation arising from same spot. That is to say, a problem of “subject” in women’s movement after world war is assumption that phenomenon arises movement in complement to gender order and reform to gender order. It is supposition that “subject” in women’s movement is parameter. It does deconstruction of gendered “subject” by agency approach. That is, this study examines both activeness and passivity of “subject” and proposes possibility of “subject”.

### 1. 本研究の目的

本論文は、戦後日本の女性運動における「主体」問題への独自の接近を試みた研究である。「主体」問題とは、「戦後日本の女性運動における主体がジェンダー化されている」という問題である。たとえば、それは平和運動における「母」、消費者運動における「主婦」という、ジェンダー秩序が定義する女性性の問題であるとともに、その名のもとに運動主体としての女性が動員されてきたという問題も含んでいる。ここでの一般的な課題とは、「母」や「主婦」といった女性性が準拠枠組みとなる女性運動におけるジェンダー秩序の再生産という問題である。

しかし、女性の従属が体系的であることと、女性たちがどうやって抑圧的な社会状況と交渉しているかは、本来同じ空間で行われているはずである。つまり、戦後日本の女性運動における「主体」問題とは、「ジェンダー秩序補完的な運動」と「ジェンダー秩序変革の運動」という現象が生じている場面であると想定することが可能なはずである。その際、女性運動の「主体」とは、その両面を「媒介する媒介者」として仮定されなければならない。すなわち、本研究は、「主体」の行為する力が発揮される、ないしは抑制される条件と効果を明らかにすることによって、戦後日本の女性運動における「主体」の可能性と困難性について考察したものである。

### 2. 研究方法—エイジェンシー・アプローチ

本研究では、以上のような問題意識、課題設定を起点とし、さらにこの課題設定に取り組む枠組みとし

て、新たにエイジェンシーという概念を導入し、主体分析に関する本論文独自のエイジェンシー・アプローチの提唱へとつなげた。この背景には、第一に、アイデンティティ・ポリティクスへの懐疑という問題、第二に、J. Butlerに代表されるポスト構造主義ジェンダー論の理論・思想潮流の中から、「主体のパッシブ・パラダイム」を乗り越える概念としてエイジェンシーという概念が登場してきているからである。本論文でも、このような「主体」をめぐる理論・思想的潮流に依拠しながらも、そこにポストコロニアル理論と脱アイデンティティ論を接合しながら、戦後日本の女性運動における「主体」問題を捉える独自の枠組みとしてエイジェンシー・アプローチを構築した。エイジェンシー・アプローチとは「主体」が、その行為によって構築・非構築・脱構築の作用を受けるエイジェンシーであること、行為がその影響を構築として行為体に沈殿させていく関係性を可能あるいは不可能にする構造化の働きに焦点をあてるという方法論のことである（図1参照）。

ここで、図1について簡単に説明を加えておきたい。

第一に、アイデンティティとエイジェンシーの関係問題である。この問題については、Butler（1990 = 1999）の議論を参照しながら検討しよう。Butlerは、アイデンティティは言説実践の効果だとして、主体の所与性を否定し、常に絶えざる生成過程にあるものだと考えた。Butlerにとって、言説行為の前に主体はなく、言説行為を通じて主体が事後的に構築される。こういう過程的な在り方を行為に先立つ主体と措定することはできないので、これをエイジェンシーと名付けるのである。行為体、行為媒体、行為遂行体とも訳さ

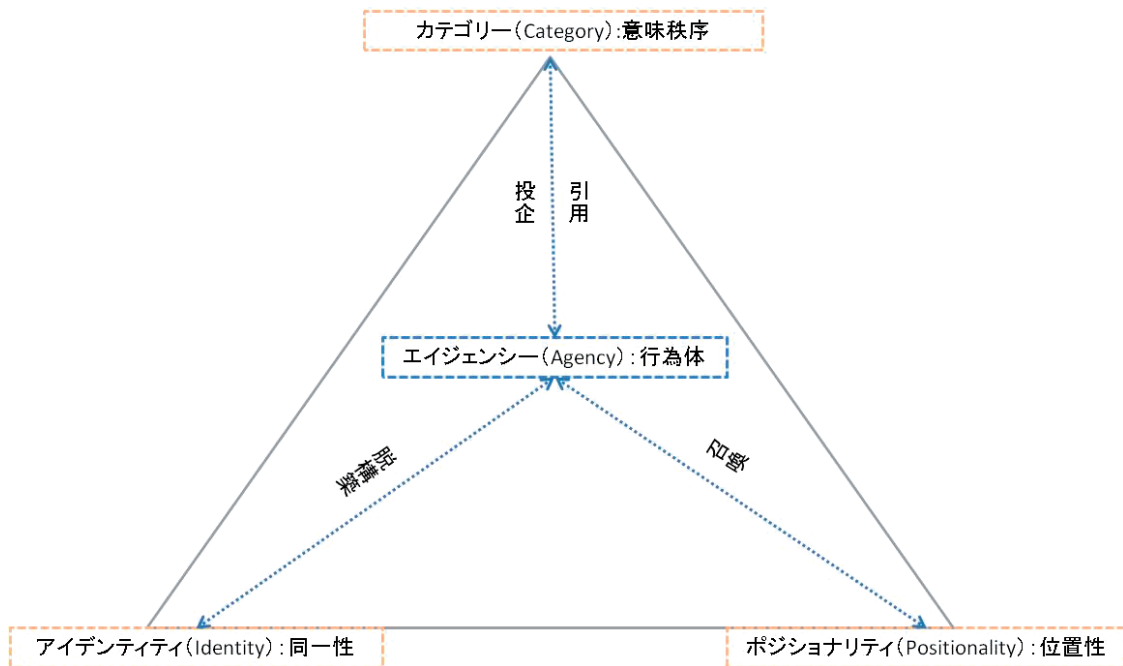


図1 主体形成の力学の場（筆者作成）

れるエイジェンシーとは、言語がそれを通じて語るプロセスそのものを指している。主体が語るのではなく、言語が主体を通じて語る媒体としてのエイジェンシーという概念が導入されたのである。そのことによって、主体概念を回避しながら、一方で完全な能動性でも、他方で完全な受動性でもないような、ひとつの言説実践の媒体を想定することが可能となったのである。

第二に、ポジショナリティとエイジェンシーの関係問題である。ポジショナリティとは、「他者が私を何者であると名指ししているのか、他者との関係で自分がどのような者として立ち現われてくるのか、その位置性」を意味するポストコロニアリズムの用語であり、アイデンティティと深く関係しているが、図式的にいえば、アイデンティティは自己に属しコントロール可能であるが、ポジショナリティは他者に属し、コントロール不可能である。石川准（2008）や三橋順子（2009）は、このポジショナリティを引き受ける実践を提唱している。たとえば、これまで精神障害者という呼びかけに対して、障害は個性だ、サバイバーと応答してきたが、そうではなくて、他者の認知をそのまま引き受けることによって、そこに自己定義を他者との関係に投企する効果が発生することに注目するのである。なぜなら、ポジショナリティを引き受けることによって成り立つ主体とは、必ずしも他認と一致するとは限らないからである。また、千田有紀（2005）は、Butler 後のポストモダン・フェミニズムが批判したとされる「女性」という「本質主義的」カテゴリーを、

改めて「投企的カテゴリー」として救い出そうとする。「女」というカテゴリーをめぐる政治を明らかにし、日本の女の置かれている被害者性と、その被害者性がそのまま加害者性につながるという回路を見出した思想実践として、日本のウーマン・リブを位置づける。当時の日本という国民国家のなかで「女」の置かれた位置、すなわちポジショナリティ（位置性）の観点からリブの方法論の再評価を試みているのである。以上の議論から明らかになるのは、アイデンティティと同様に文脈依存的なポジショナリティという概念を用いることによって、アイデンティティ概念に依拠しない「主体」の記述の可能性が示唆されているのである。

第三に、アイデンティティとカテゴリーとの関係問題である。それは、アイデンティティの政治には還元しないカテゴリーの政治について検討することでもある。ここでは伊野真一（2005）の議論を参照しよう。伊野は、差別語オカマをめぐる論争の考察を通して、それをカテゴリーの政治として位置づける。オカマという「侮蔑語を禁止したとしても、その意味が内包していた差別的な文脈は温存される。むしろその言葉を流用することによって、侮蔑の文脈が再生産されるリスクを冒しながらも、そこに新たな意味が呼びこまれる可能性に賭ける」。すなわち、カテゴリーの政治とは、アイデンティティが第一義的な前提とはされない、カテゴリーのパフォーマティブな実践を意味している。カテゴリーのパフォーマティブな引用の中で生じるズレのなかに変革の契機を見出していく作業は、アイデンティティの政治の呪縛のなかでは見えてこない政治

的手法だと言える。

以上の議論から、本研究におけるエイジェンシー・アプローチを次のように定義する。エイジェンシーとは、構造の再生産に変容を組み込むことで、政治的抵抗を理論化する概念であり、行為の受動性と能動性の調停の場そのものである。すなわち、エイジェンシー・アプローチは、ある人の行動・認識が、ある人と社会構造との力関係によってしか成立しないという前提を強調する。ポジションナリティとカテゴリーとの複雑な構造の中で生起する行為体は、構造に対して全く受け身ではなく、変化の過程に組み込まれていること自体によって、わたしと構造を変えていく可能性もっているのである。

### 3. 結果と考察

以上のようなエイジェンシー・アプローチの観点から、具体的には、「滋賀県琵琶湖の石けん運動」と「雪印100株運動」の二つの女性運動を取り上げ、それぞれの「女性運動」における「主体」問題について分析・考察を加え、本論文で提示したエイジェンシー・アプローチの方法論としての妥当性の検証と、戦後日本の女性運動における「主体」のダイナミズムを捉えることに成功した。これらの研究成果は、社会運動研究領域への貢献として位置づけられる。一方、ジェンダー研究領域の貢献としては、エイジェンシー・アプローチを用いることで、ジェンダー化された「主体」という本質主義を問題化するのではなく、そうした本質主義そのものを解体することに成功した点があげられる（ジェンダー化された「主体」の脱構築：ジェンダーカテゴリーから投企のカテゴリーへ、アイデンティティからポジションナリティへ）。

第一に、それぞれの社会的行為体の応答可能性がジェンダーによって規定され、その規定力にかかわることによって社会的行為体を構築するジェンダーの分節化もまた変化する可能性があるために、ジェンダー秩序が要請するのは、近代の国民国家体制が女性に割り当てた指定席である「女性性」の名のもとにおいて動員可能性を拓くという権力関係をとる。たとえば、琵琶湖石けん運動の場合は、「母」「主婦」「消費者」として、雪印100株運動の場合は、「農村女性」「女性農業者」「百姓のおばちゃん」として、ジェンダー体制内部で動員される「主体」の差異化する／差異化される「主体」構築の政治の中に位置していることが明らかになった。しかも、このようなジェンダー秩序による「主体」構築の政治とは、常に分の悪い投企を運動「主体」に迫るという点に特徴がある。そして何

より、他者性への構造へと呼びかける可能性を維持するためには、社会的行為体はその脆弱な可能性を指し示すために、「常に何者かで在り続けなければならない」のである。

第二に、社会的行為体の生成とは、差異を生起する生存可能性の要求が他者から棄却される可能性を孕みつつも、応答を呼び起こす差異への可能性をも同時に孕んでいることを確認することができた。その可能性とは「投企的意味」の発露であり、社会的行為体に対する自己認識と他者認識との差異の間に現れる。滋賀県琵琶湖石けん運動の場合、同じ「主婦」カテゴリーであっても、それが合成洗剤追放運動という集合行為の中でそこから逸脱し、「主婦」カテゴリーと活動との関係が書き直される契機が生じていた。雪印100株運動の場合には、株主総会における発話行為をとおして、「百姓のおばあちゃん」という他認と、「女性農業者」という自己定義との差異の政治の中で、資本主義体制と農民との圧倒的な権力関係の構図が露わになった。

すなわち、戦後日本の女性運動における「主体」問題を、エイジェンシー・アプローチの観点から捉え返す試みから明らかになるのは、たとえそれが、ジェンダー秩序が要請する「女性性」であったとしても、そこで生起する社会的行為体は、権力と抵抗の言説のただ中に同時に位置しながらも、その中で行為媒介者として応答責任を果たす存在であるということである。つまり、女性運動という集合行為は、エイジェンシーが発揮される場所として機能しているし、新たな文脈を不断に作り出してく効力も持っているということである。

### 4. 参考文献

- 上野千鶴子『脱アイデンティティ』勁草書房、2005
- 金井淑子『ポストモダン・フェミニズム—差異と女性』勁草書房、1989
- ジュディス・バトラー（竹村和子訳）『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社、1999
- 横山道史「びわ湖石けん運動の再評価—エコロジカル・フェミニズムの実践として」『横浜国立大学技術マネジメント研究学会』第4号、2004、pp.23-35
- 横山道史「女性農業者による株主運動の視座—『食糧民主主義運動』としての雪印100株運動」『ジェンダー研究』東海ジェンダー研究所、第10号、2007、pp.101-21